

仮想化 お客様導入事例

株式会社インフォセンス

<http://www.info-sense.co.jp/>



適用業務

社内基幹系

ハードウェア

IBM® Power® 595
IBM BladeCenter® JS12

お客様情報



山九株式会社

株式会社インフォセンス

〒812-0039
福岡県福岡市博多区冷泉町2-1
博多祇園M-SQUARE

「人を大切に」を基本理念とし、社名の由来でもある「ありがとう」の心を持ち続ける山九グループ企業として1989年4月に設立された株式会社インフォセンスは、ITビジネスソリューションサービス事業、システムインテグレーションサービス事業とともに、ネットワークやハードウェア基盤、System Life Cycle (SLC)を提供するITインフラソリューション事業を展開しています。

増え続けるサーバーをIBM Power Systemsで統合 ～TCO削減とSLA向上を両立する事業基盤を構築～

株式会社インフォセンス(以下、インフォセンス)は、総合物流企業である山九株式会社(以下、山九)を中心とする山九グループのグループ企業で、グループ各社のシステム開発・運用を担っています。安定した事業基盤を構築するという山九グループの中期目標を実現すべく、2009年、インフォセンスは、TCO (Total Cost of Ownership)の低減を図るため、増え続けてきたサーバーをIBM Power 595とIBM BladeCenter JS12に統合しました。

増え続けるサーバー。コスト削減とサービスレベル向上の両立が課題に

インフォセンスが抱えていた課題の一つは、オープン化、ダウンサイジングの波で230台近くまで増え続けたサーバーです。それは保守・運用コストの増大とデータセンターのスペース不足を生んでいました。インフォセンス 第一システムソリューション事業部 ITインフラソリューション部長 安東史典氏は、増え続けるサーバーについて次のように説明します。「これまでではプロジェクト単位にサーバーを購入・構築していたため、今の要員では手が回らなくなっていました。また、今のペースでサーバーが増えていくと、1年後にはデータセンターが満杯になってしまうことが予想されました。他のデータセンターへの移設も検討しましたが、それには莫大な費用とリスクが発生することがわかりました」そして、インフォセンスが抱えていたもう一つの課題は、サービスレベル(SLA)の向上でした。「物流のグローバル化などにより、システムの重要性はますます高まっており、24時間365日化など、システムへの要求は高まる一方でした」(安東氏)。

ばらばらだったITインフラをAIXを標準とした新システムに移行

TCO削減とSLA向上。この相反する二つの課題を両立するためにインフォセンスが考えたのが、ITインフラの標準化でした。「従来は業務システムごとにセキュリティー機能や高可用性機能といったインフラ構成を検討・調達していたため、信頼性・可用性・拡張性にばらつきができていました。また、こうした個別最適化のアプローチでは、どうしても余裕を見たキャパシティー見積もりをしてしまうためオーバースペックになりがちで、資源が有効利用されないという状況を生み出していました」(安東氏)。

インフォセンスは現状システムのインフラ構成を分析し、標準化された五つの「統合アーキテクチャーモデル」を定義しました。その特徴の一つは、DBやパッチにはスケールアップ型、アプリケーション(AP)サーバーとしてはスケールアウト型といったように、機能要件ごとに使い分けを明確にした点にあります。「今後山九グループでのシステムはこの統合アーキテクチャーモデルの上で、個別システムを開発することにしています。そうすることで、迅速な開発・設計と、シンプルな運用・管理を実現でき、ひいては全体のコスト削減につながると考えています」(安東氏)。

続いてインフォセンスでは、統合アーキテクチャーモデルに最適な統合サーバーを選定していきました。その結果、DBサーバーなどのスケールアップ型は2台のPower 595に仮想統合することにしました。2台の物理サーバーは、アクティブ機とスタンバイ機の関係ではなく、複数の仮想サーバーが2台にバランスよく分散され、常に両者が稼働しているアクティブ-アクティブ構成を採用しています。また、スケールアウト型はブレードサーバーJS12で物理統合することにしました。

